

## [国 語]

## 説明的文章を書く力を高める小学校2年生国語科指導の工夫

- 学び合いによる仲間づくりを通して -

室谷美香子\*

## 1 問題の所在

新学習指導要領における国語科低学年「書くこと」の目標は、「経験した事や想像した事などについて、順序が分かるように、語や文の続き方に注意して文や文章を書くことができるようにするとともに、楽しんで表現しようとする態度を育てる」である<sup>1)</sup>。OECD（経済協力開発機構）のPISA調査などの結果から、思考力・判断力・表現力等の育成が重要課題とされている。表現力育成の根幹を担う国語科において、自分の率直な思いや願いを相手に伝わるように書く力を身につけることは、意義がある。

しかし、小学校2年生段階の児童の作文は、文全体が羅列的であったり、話の順序が入れ替わったりすることが多い。そのため、読み手にとって、内容が分かりにくくなる。書きたいことを整理する力がまだ乏しく、思いついた順に記述するためである。また、この時期の児童の中には、音声言語を用いた表現活動は得意であるのに、文字言語に書き起こそうとすると、書き方が分からなくなる者が多く見られる。話し言葉と書き言葉の区別が難しく、自分の感じている気持ちをどう表現して良いか分からないのである。結果、作文に苦手意識をもっている児童は、「また上手く書けなかった」「書くのにとっても苦労した」という失敗体験を積み重ね、「楽しんで表現しようとする」ことから、乖離していく。

藤川尚子（2008）は、「生活科をはじめとする他教科との関連を図ることや、児童の社会体験や自然体験など、さまざまな活動と書く活動とを関連づけた指導を計画する必要がある。」と述べた<sup>2)</sup>。

中山舞（2011）は、「漠然とした不十分な自分の考えを、話し言葉にして相手に伝えることによって振り返り、相手の言葉に触発されることで即興的に新しい考えを生み出していく。これらを繰り返す過程で、考えを練り上げ、自分の思いや願いを明確にしていくことができる。」と述べた<sup>3)</sup>。

また、金田一清子（2008）は、「友達からの励ましにより、書くことに苦手意識をもつ子どもでも、書くことに自信をもち、次への意欲につながる。」と述べている<sup>4)</sup>。

そこで、児童が楽しみながら書く力をつけていく学習過程を重視する。体験活動との関連づけや、友達とのかかわり合い、教え合い、読み合い、認め合いを行う。思いを伝える相手が明確にすることで、読み手を意識した豊かで分かりやすい文章表現が生み出されると考える。書く活動の中に学び合いを取り入れ、かかわり合いの精度を高めて適切な仲間関係を形成することで、個々の書く力の向上につなげていく。

## 2 研究の目的

本研究の目的は、次の二つである。

- ① 体験を踏まえた書く活動を展開することが、児童の豊かな表現を生み出し、順序や整合のとれた分かりやすい文章を書くことに有効であることを明らかにする。
- ② 書く活動の中に学び合いを取り入れ、友達と望ましい姿でかかわる力を伸ばすことが、個々の書く力の向上と、苦手意識の軽減に有効であることを明らかにする。

## 3 研究の内容と方法

2011年、担任する2学年の児童30名に対して、次のような手立てを用いて国語科単元「分かりやすく説明しようーお

\* 上越市立豊原小学校

もちゃの作り方」の授業実践を行った。作文の分析、他者評価、抽出児童の変容の様子から、研究の成果と課題をまとめる。

(1) 生活科との関連づけ

本單元では、前單元「読んで説明の仕方を考えようーしかけカードの作り方」で学習した分かりやすい説明の仕方を活用し、実際に簡単なおもちゃの作り方の説明書を書く活動を行う。説明書を作る必然性や、相手意識、目的意識、楽しんで活動する意欲をもたせるために、生活科の單元「あそびランドへようこそー動くおもちゃー」と関連づける。

生活科では、作りたいおもちゃの希望アンケートを基に、3、4人のグループを編成し、一緒におもちゃの設計図を描いたり、実際に作って遊んだりする。

国語科では、生活科で作ったおもちゃの説明書づくりに焦点をあてる。試行錯誤したり仲間と楽しく活動したりした思いが、豊かな文章表現につながると考える。

活動の締めくくりとして、完成した説明書を教室内に掲示し、生活科で「おもちゃ作りランド」を開くことを児童に予告する。「おもちゃ作りランド」とは、他のグループの人達に説明書を見ながら実際におもちゃを作ってもらう活動であり、作り上げた説明書が、本当に分かりやすいものになっているか、他者評価するための場である。「自分たちの作ったおもちゃを他のグループにも作ってもらおう。」と児童にめあてを示すことで、誰のために、何のために説明書を書くのかを明確にし、相手を意識した分かりやすい文章を書くことをねらう。

(2) 少人数グループでの学び合いの場の設定

風力で動くおもちゃ作りを3、4人で行い、そのおもちゃの説明書をグループで協力して作る。グループで相談しながら説明書を書いたり、お互いに読み合ったりすることで、説明書を読む相手を意識した表現の仕方が身につくようにする。

また、学び合いの際に、苦手を補い合い、お互いの良さを発揮できるように、メンバー構成に配慮する。書く力が等質の小集団では、学び合いの中で、お互いの力を高め合うことが難しい。グループ編成は、児童の希望を最優先に行うが、教え合ったり話し合ったりする学び合いが可能な構成とする。

(3) 望ましい姿でかかわり合う力の強化

学び合いの場を設定するだけでは、児童はどのようにお互いの力を高め合えば良いのか分からない。支え合ったり認め合ったりするモデルを示し、望ましいかかわり合いの姿を具体的にイメージさせる必要がある。

そこで、活動の最中に見られた望ましいと考えられる言動を教師が吹き出しに書いて取り上げ、紹介していく。良い学び合いのモデルを示すことで、学び合いの質を高め、仲間から学ぶことで、一人一人の書く力の向上を図る。(図1)

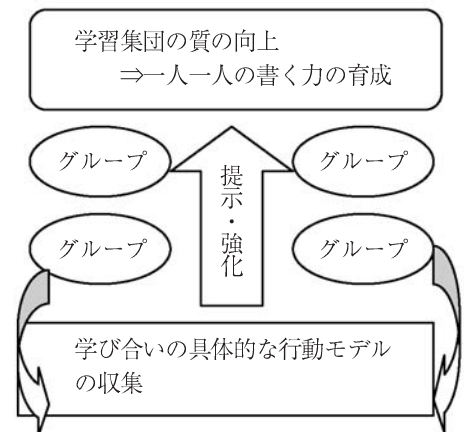


図1 学び合いと書く力の向上の関係図

4 実践の概要

単元の実践の概要について、以下に紹介する。

(1) 単元名 分かりやすく説明しようーおもちゃの作り方ー

(2) 単元の目標

- 相手に分かりやすく伝えるための言葉の使い方や説明の順序を仲間と協力して考える。
- おもちゃの作り方の手順に沿って、絵を用いながら文章を書く。

(3) 単元の展開

次	ねらい	主な学習活動
1 (1)	・教材文を読んで、分かりやすい説明の仕方を確かめる。	・単元めあてを確認し、説明の仕方を確かめる。
2 (4)	・説明の仕方を確かめながら、おもちゃの作り方を分かりやすく書くことができる。	・製作過程を場面ごとに分け、絵にかき表す。 ・説明の仕方を確かめ、作り方をカードに書く。カードの並

		べ方を話し合う。必要な接続詞を補う。 ・「おもちゃ作りランド」を開いて説明書を読み合い、感想を伝え合う。(生活科との合科)
3 (1)	・作り方や使い方、遊び方が書いてある本を読んで、説明の工夫を見つけることができる。	・図書館にある何かの作り方や遊び方の本を読み、説明の工夫を見つけて、ノートにまとめる。

5 授業の実際と考察

(1) 生活科との関連づけ

風力で動くおもちゃで、どんなものが作れそうかと呼びかけた際、児童は次の9つのおもちゃを考案した。

- かざぐるま ○車 ○船 ○風鈴 ○ストロー笛
- びゅんびゅんゴマ (牛乳パックの底を切り抜き、中央にたこ糸を通して、回転させて遊ぶおもちゃ)
- プカプカボール (ストローの先端に針金を巻き付け、アルミ箔で作ったボールを息で吹いて飛ばすおもちゃ)
- フーフーゴルフ (段ボール箱の上にゴルフコースを作り、アルミ箔で作ったボールにストローで息を吹きかけ、ゴールをねらうおもちゃ)
- パタパタボーリング (ペットボトルでボーリングのピンを作り、新聞紙で作ったボールをうちわで扇いで送るおもちゃ)

一番作ってみたいおもちゃのアンケート調査を実施し、学び合いが可能な編成を念頭に置いて、3, 4人でのグループ分けを行った。

生活科の学習では、授業の終わりに活動の振り返りを必ず設定し、「どのように改良したらより良く遊べるおもちゃになるか」ということを、常に考えさせるようにした。おもちゃ作りの段階で試行錯誤を積み重ねることが、のちの説明書づくりの段階で、生き生きとした表現に表れると考えたからである。おもちゃを改良していったグループの活動の流れと、作成した説明書を以下に示す。(図2)

びゅんびゅんゴマチームの例

おもちゃ作りのプロセス

第1時 作り方を見ながら、書かれている通り製作  
課題発見：きれいに回転する物としない物がある

↓

第2時 穴を開ける位置や糸の長さを変えてみる  
課題解決：穴を縦に開けるより、横に開ける方が回る  
たこ糸は短い方がうまく回る

↓

第3時 牛乳パックの底以外でも作れるか試す  
新たな課題発見：素材の吟味

《説明書》

まず、牛にゅうパックのそののぶぶんのまわりを、きれいに切ります。牛にゅうパックの下のぶぶんのところいがいは、切ってもあまり回りません。

つぎに、あな切りで牛にゅうパックのまん中らへんを、2つさします。あなのいち、よこがわのほう回ります。

それから、牛にゅうパックに絵をかきます。回した時に、きれいなようになるようにしてください。

さいごに、たこ糸をといたらできあがりです。たこ糸をみじかくしたほう回ります。 (以下省略)

図2

このグループは、おもちゃ作りの1時間目に、作り方の書かれた本を見ながら、みんなでびゅんびゅんゴマを製作した。出来上がった物で遊んでみると、よく回る子とあまりよく回らない子がいることに気付いた。あまり良く回らなかった女兒Aは、「わたしのだけ回らなくてくやしい。なんで?」と、とまどった気持ちを率直に振り返っている。そこで次の時間に、違う人が回してみたり、作り直してみたりと、いろいろなやり方で試行してみることにした。その結果、回し方が悪かったのではなく、穴を開ける位置が違とうまく回らないこと、たこ糸を長くしても、かえってうまく回らないことが分かった。

2時間目の振り返りで、グループの女兒Bが、「家からもっと牛にゅうパックをもってこようって話し合いました。びゅんびゅんゴマってあまりいっぱい作れない。」と記述した。作り方の本には、牛乳パックの底を切り抜いて使うと書いてあったからだ。1本の牛乳パックから、1つのびゅんびゅんゴマしか作れないことになる。そこで児童は、次の

時間に、底以外の部分からびゅんびゅんゴマを作ることができるか、試行した。結果は、糸が引つ掛かるばかりでうまく回転しなかった。その体験が、説明書の「牛にゆうパックの下のぶぶんのところいがいは、切ってもあまり回りません。」という、素直で分かりやすい表現の中に表れている。

おもちゃを作る際の試行錯誤した体験が、「うまく作るためのコツ」または「楽しく遊ぶためのコツ」として、説明文の表現に表れたチームは、9チーム中7チームあった。残りの2チームは、コツやアドバイスといった表現はなかったが、何をどこにどうするか、どれくらいどうするのかが、言葉や絵で具体的に記述されていた。どちらも、おもちゃを作る相手を意識した分かりやすい表現を目指したものである。試行錯誤による体験の質を高めたことは、より高度な気付きと、気付きを基にした豊かな表現をもたらした。生活科と関連づけたことは、実際に作った体験を思い出しながら書くことができ、児童それぞれから分かりやすい説明文を生み出すことにつながった。

### (2) 他者評価の場の設定

全グループの説明書が完成した段階で、説明書を読み合い、感想を伝え合うための「おもちゃ作りランド」を開いた。実際に読んでくれる人、おもちゃを作ってくれる人が身近にいれば、児童は説明書を作る楽しみや喜びを増大させる。学級内で「おもちゃ作りランド」を開くことを目的に説明書を作ることで、児童は相手意識と目的意識を明確にもち、最後まで意欲的に活動できると考えた。

説明書を教室内に掲示し、自分が作ってみたいおもちゃの説明書のところへ、児童が自由に移動できるように、場を設定した。説明書を読んでおもちゃを作り終わったら、作ってみて感じた気持ちや感想を付箋に書いて、説明書に貼る。児童が実際に書いた感想の例を、以下に示す。

- ・【びゅんびゅんゴマチームさんへ】  
こんでて作れなかったから、家でやってみます。2ばん目のせつめいが、わかりやすいと思いました。
- ・【プカプカボールチームさんへ】  
ボールのせつめいで、マジックペンのどこではり金をまきつければいいのかわからなかったの、こんどは気をつけてください。
- ・【フーフーゴルフチームさんへ】  
すごくてのしかったです。点数も書いてあってよかったです。
- ・【風鈴チームさんへ】  
すずのところがちよっとわかりにくい！けど、絵がじょうずだね。

分かりやすく具体的に書いたつもりでも、おもちゃを作る相手にとっては、説明が足りなかったり、表現が分かりにくかったりすることがある。友達から感想をもらうことで、児童は自分の知らなかった新しい表現や、説明の補足の必要性に気付くことができた。

「おもちゃ作りランド」終了後の振り返りでは、「じぶんではうまく書いたつもりだったけど、ちょっとわからないと言われてざんねんだった。もっとうまく書けるようになりたい。(女児)」「せつめいじょうずだねって言われてうれしい！またおもちゃ作りたいです。(男児)」といった感想が上がった。全ての説明書が友達から肯定的に評価されたわけではなかったが、児童の「もっと分かりやすく書けるようになりたい」という意欲や、「分かりやすいって言ってもらえてよかった」という自己肯定感を生み出すことにつながった。

### (3) 学び合いの場の設定

作文は、一人一人が自分の書きたい内容と心の中で向き合って、書き進めるものである。しかし、書くことに苦手意識をもっている児童は、一人でやっても、ずっと劣等感を拭い去れず、うまく書けない。そこで、グループでの学び合いの場を設定し、書き方を相談したり、お互いに文を読み合ったりするようにした。

おもちゃの作り方を、製作過程ごとに場面で分け、グループの中で一人一場面ずつ担当する。場面と場面の区切りが分かりやすいように、文を書く前に絵を先に描くようにした。作文が苦手な児童も、先に絵を描くことで、絵に対応した文を書こうと意識することができる。そのようにして完成したのが、右図の説明書である。(図3)



図3 風鈴チームの説明書

分かりやすい表現の仕方について話し合ったり、出来上がった文をお互いに推敲し合ったりするためには、全ての児童が「分かりやすい説明文とはどんなものか」を理解していなければならない。そのために、前単元である「読んで説明の仕方を考えようーしかけカードの作り方ー」で学習した伝わりやすい説明の工夫を、「説明名人のコツ」として示した。そして、説明文を書く前や文を推敲する際に、常に確認できるようにした。示した「説明名人のコツ」は、以下のとおりである。

- |   |
|---|
| ① 前書き、材料と道具、作り方、使い方（遊び方）に分けて書く。         |
| ② 順番を表す言葉を使って書く。（まず～、つぎに～、そして～、さいごに～ 等） |
| ③ 数や長さ、大きさははっきり書く。その際、数字を使うと分かりやすい。     |
| ④ 写真または絵と、文を合わせて書く。                     |

「分かりやすい説明の仕方」を明確に提示したことで、作文を苦手に行っている児童も、順序や整合性を意識した分かりやすい文章を書くことができた。（図4）

車チームの例 ※前書き、材料と道具の部分は、省略

1 場面（男児A）	まず、ダンボールを羽の形に切って、ペットボトルにすきな色のテープで、ペットボトルのよこのところに2まい、くっつけます。
2 場面（男児B）	つぎに、ペットボルの下に半分に切ったいたを、すきなテープではりつけます。
3 場面（男児C）	それから、半分に切ったいたに、タイヤをボウに1ことうしたら、はんたいがわもタイヤをとうします。うしろのしゃりんも同じようにします。
4 場面（男児D）	さいごに、白い画用紙に竹ぐしをテープではりつけます。これは、うちわになります。
5 場面（男児E）	これで、車のできあがりです。画用紙うちわで車をあおいで、走らせてあそびます。

図4

手順が明確で、順序と内容が分かりやすく示された説明書には、接続詞が正しく使われる。また、何をどこにどうすればよいのか、作り方が大きさや数で、具体的に示される。そこで、車チームの説明書のうち、接続詞を適切に用いている部分に~~~~~を、数や長さ、大きさを表す言葉を用いている部分に□を付した。5人全てが、適切に接続詞を用いていること、A、B、C 3人の作文から、大きさや数を表す表現が見られることが分かる。D、Eの作文には、大きさや数の表現はないが、「白い画用紙に竹ぐしを」「画用紙うちわで車をあおいで」といった文章で、何をどこにどうするのか明確に書かれているため、内容が分かりやすくなっている。

このグループの児童のうち、男児Bと男児Cは書くことに強い苦手意識があり、これまでの作文指導では、個別支援を行うことが多かった。書き上げた説明文は、誤字脱字が含まれているものの、本単元で学習した「分かりやすい説明の仕方のコツ」を活用して、分かりやすく書くことができていた。男児Bは語彙が乏しく、句読点や「てにをは」、助詞などの間違いが多い児童であった。しかしこの説明書作りでは、文は自分の力だけで書き上げ、絵は仲間の作品を参考にしながら、上手に作るポイントを付け加えて書くことができた。男児Cは音声言語の活動に優れているが、作文になると文型が分からずに困ることが多い児童であった。実際の活動で、書き始めの言葉に悩んだCは、仲間に相談することで、適切な接続詞を使用し、何をどうするのか分かりやすい説明文を書くことができた。

チームの中での順序を意識した適切な接続詞の使用は、30人全ての児童の説明文から見られた。また、大きさや数を具体的に表す表現は18人、場所（どこに）や量（どのくらい）、やり方（どうやって）を具体的に表す表現は、26人の説明文から見られた。

#### （4）望ましい姿でかかわり合う力の強化

学び合いを取り入れても、正しいかかわり方を知らなければ、児童はどのように相手にかかわってよいのか分からない。かかわり方が悪かった場合、かえって心に深い傷を残し、書く力や意欲を減退させることになる。教師が毎時間の授業の中で、望ましいかかわり方をしている児童の姿を見取り、その都度学級全体に広げていくことが、最も重要である。

本単元では、児童から見られた望ましいかかわり合いの姿・言葉掛けを、吹き出しに書き出し、学級全体に紹介した

後に蓄積した。実際に集まった言動の例は、以下のとおりである。(図6)

	かかわり方	言葉掛け
吹き出しに 集まった言 動	うなづいて聞く、(困っている様子なら) 声を掛ける、 相手に近づく、褒める、読んであげる、困っているこ とを相談する 等	じょうずだね、わかりやすいね、いい言葉だね、よく 書けてるね、おもしろいね どうしたの、手伝うよ、一緒にやろう 等

図6 【本単元の授業をとおして集まった望ましいかかわり合いの姿・言葉掛けの例】

教師がその場で褒め、全体に取り上げたことで、9チーム全てから、仲良くかかわり合って説明書を作ろうとする具体的な姿勢や言動を見取ることができた。例えば、ストロー笛チームは、書き出しの表現に苦しみ仲間のために、4人全員が顔を寄せ合って一緒に考えていた。風鈴チームは、4人全員の説明文に、うまく作るためのコツを書き加えようと、全員でアイデアを出し合っていた。結果、かかわり方がより親密であり、よい言葉掛けが多かったチームほど、完成した説明書の表現の仕方や接続詞の使い方に統一感があり、分かりやすい説明文になった。

30人の児童のうち、特に作文に苦手意識をもっており、個別支援を必要としていた5人の児童に、単元の学習終了後、アンケートを実施した。「チームで説明書を作ったことで、楽しく作文を書けたか」という質問には、5人全員が「はい」と答えた。「作文が苦手ではなくなったか」という質問には、5人中3人が「はい」と答えた。全員の苦手意識を払拭することはできなかったが、「楽しく書けた」とは全員が答えている。書く活動に学び合いを取り入れ、かかわり方の質を向上させたことは、児童の書く活動への苦手意識の軽減につながった。

## 6 研究のまとめと今後の課題

今回の研究を通して、2つの成果と1つの課題が明らかになった。

成果の1つ目は、体験活動を通して、豊かな表現力を身につけさせることの意義である。研究の結果から、自らが実行したことを丁寧に思い出しながら文章に表していくことは、児童の文字言語を巧みにし、より具体的で分かりやすい表現へと、向上させていくことが分かった。その際、相手意識を明確に持たせることで、より読み手を意識した分かりやすい表現が生まれることも分かった。

2つ目は、他者評価や学び合いによる、適切なかかわり合いがもたらす効果である。他者から評価されることで、児童のより良い表現への欲求や自己肯定感が高まることが分かった。また、互いの苦手を補い合って学ぶことで、個々の表現技能が高まり、作文への苦手意識が軽減することも分かった。

課題は、どのようにして、より質の高い学び合いができる集団を形成していくか、ということである。今回の研究においても、より望ましいかかわり合い方ができたグループの方が、書き上げた作文の表現が豊かで分かりやすいという結果が出た。今後は、一人一人にどのようにして適切に仲間とかかわる力を身につけさせるか、有効な手立てを更に探究する必要がある。仲間と適切にかかわり合う力の伸長を探究することは、今日において、児童の社会性の育成にもつながる、極めて重要な課題であり、今後も研究を深めていきたい。

### 《引用文献》

- 1) 文部科学省 『小学校国語科学習指導要領解説国語編』 東洋館出版, 2008年, p.34
- 2) 藤川尚子 「低学年における書く指導のポイント」, 瀬川榮志監修, 北海道国語教育連盟著, 『低学年の書くことの指導』 明治図書, 2008年, p.16
- 3) 中山舞 「表現豊かに書く児童の育成を目指す試み—友達とのかかわり合いを通して考えを振り返り練り上げる—」 『教育実践研究』 第21集, 2011年, p.53
- 4) 金田一清子 「作文の構成—四コママンガで場面の切り取りを—」, 柴田義松監修, 『入門期とその発展—読み・ことば・作文—』 日本標準, 2008年, p.106